

# 常習飲酒運転者の飲酒行動抑止に関する調査研究 報告書概要

## ◆ **本調査の目的及び方法等**

### 背景及び目的

- ・ 背景：政府の「常習飲酒運転者対策推進会議」においてとりまとめられた「常習飲酒運転者対策の推進について」に基づいて実施された調査。
- ・ 目的：我が国における総合的な常習飲酒運転対策の方向性の提言。

### 調査研究の内容・方法

- ・ 内容：平成20、21年度の2ヶ年にわたり、常習飲酒運転者の実態把握、課題の抽出、総合的な対策の検討を実施。  
また、諸外国の例を参考とした常習飲酒運転者対策の効果を検証。
- ・ 方法：調査委員会、検証実験WG、教育的プログラム小委員会を設置し、検討及び実証実験を実施。

### 本調査に用いる用語

- 常習飲酒運転者
  - ・ 常習飲酒運転者という用語について、「常習飲酒運転者」を「飲酒運転を繰り返す者」と定義する。
- ハイリスク飲酒者の定義
  - ・ アルコールに関する問題の程度に応じて対策が異なると考えられることから、アルコール依存症者までは至らないが、問題を有している、又は今後有する可能性が高い者を「ハイリスク飲酒者」として定義。
  - ・ アルコール依存症者、ハイリスク飲酒者のいずれにも該当しない者であってもリスクが全く存在しないわけではないことから、そうした者を「ローリスク飲酒者」と定義。
- アルコール依存症者、ハイリスク飲酒者、ローリスク飲酒者の区分の仕方
  - ・ アルコール依存症については、基準に基づいて診断されるもの。
  - ・ ハイリスク飲酒者については、将来問題を生じる可能性の高い者を選別可能な AUDIT（8点以上）を目安として使用することが可能。

### 論点の整理

- 飲酒運転を行うリスク
  - ・ 飲酒した後アルコールを分解するのに必要な「十分な時間」を経るまでの間、運転をしないことが基本的な考え方。特に、飲酒に関する問題を有することにより、そうした分離をできない者への対策を検討した。
  - ・ 飲酒量、飲酒頻度、多量飲酒頻度が高くなるに従い、飲酒運転リスクが高まるとの調査結果もある。
- 飲酒行動の変更と運転行動の変更による飲酒運転の抑止効果
  - ・ 飲酒運転対策として、ブリーフインターベンション等の教育的プログラム及びアルコール検知器、アルコール・インターロックといった装置の使用が行われており、これらの飲酒行動の変更を引き起こす効果について検証。

## - アルコール関連問題

- ・ アルコールに関する問題について、飲酒者は、アルコール依存症のみならず、依存症にまでは至らないものの問題のある飲酒など、様々な段階に連続的に分布。アルコールへの依存の程度が軽い場合は、酒量を減らすことにより、アルコール依存症への進行を予防し、正常な飲酒者へと戻る可能性もある。

### 治療・教育方法について（断酒、減酒等）

- ・ アルコール依存症は、脳の機能、構造に変化を生じさせる病気であり、アルコール専門医療機関等における専門的治療が必要。
- ・ ハイリスク飲酒者に対して、海外ではブリーフインターベンションの有効性が認識されてきている。一方、国内では一般的な手法として確立されていないのが現状。地域の特性や国民性を考慮して、ブリーフインターベンションの効果を検証。

## ◆ 検証実験について

### 検証実験の目的

- ・ ブリーフインターベンション又はアルコール・インターロックシステムを用いたプログラムについて、その効果を検証し、対策を検討するための基礎資料とする。

### 検証実験の概要

- ・ ブリーフインターベンションやアルコール・インターロックシステムの装着（6ヶ月間）により生じる飲酒日数、飲酒量、多量飲酒日数の変化を、3ヶ月後、6ヶ月後、12ヶ月後に調査。

### 検証実験の内容

- ・ 参加者をA,B,C,D群の各群にグループ分けし、各群について、それぞれ以下の通りプログラムを実施し、群間の結果を比較した。

A群：ブリーフインターベンション（51名）

B群：ブリーフインターベンション及びアルコール・インターロック（14名）

C群：アルコール・インターロック（パンフレットを配布）（16名）

D群：対照群でありプログラムはなし（パンフレットを配布）（45名）

### 検証実験の結果

#### （効用）

- ・ ブリーフインターベンションは、実施後1年以上、飲酒日数、飲酒量、多量飲酒日数を、安定して減少させる効果があった。また、多くの者に受け入れられやすいものであることが明らかとなった。（図1～図3）

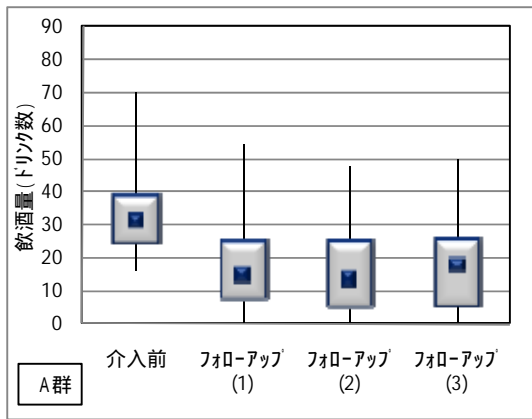


図1 1週間の飲酒量（ドリンク数）の推移

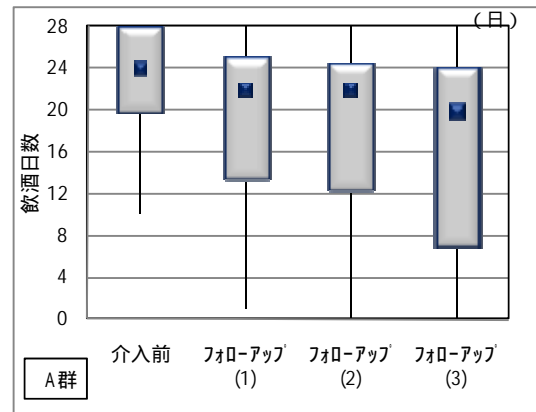


図2 4週間の飲酒日数の推移

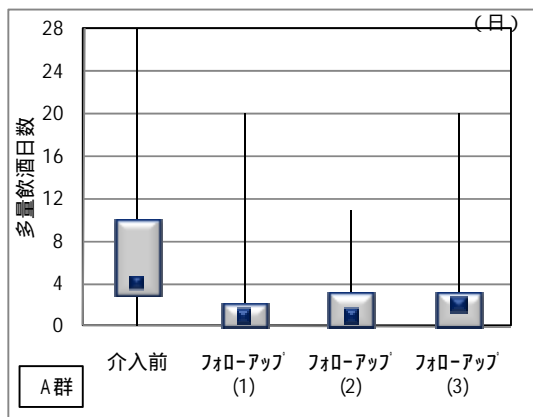


図3 4週間の多量飲酒日数の推移

(注) グラフの見方  
 ヒゲの上下：最大値、最小値  
 の上下：75%ile、25%ile  
 ：中央値  
 1ドリンク：アルコール摂取量 10g

(X軸)  
 フォローアップ(1)：3ヶ月後  
 フォローアップ(2)：6ヶ月後  
 フォローアップ(3)：12ヶ月後

- ・ アルコール・インターロック装置については、多量飲酒日数を減少させる傾向が見られた。(図4)

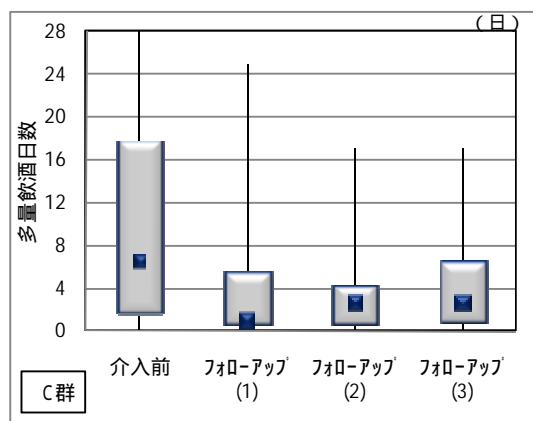


図4 4週間の多量飲酒日数の推移

(留意点)

- ・ プリーフインターベンションを実施後の効果の持続時間には個人差がある。
- ・ アルコール・インターロック装置について、飲酒量の削減効果は一時的な効果に留まる。また、管理者によりバイパススイッチの使用を管理した場合の結果である。さらに、市場に出回っている装置に信頼性が確保されていないものが含まれていることに加え、装置の使用に係る使用者の負担が大きい。

## ◆ 我が国の常習飲酒運転者対策を取り巻く課題と方向性

常習飲酒運転者対策で求められる目標

- ・常習飲酒運転者対策ではアルコールに関連する問題を認識した上での取組が求められる。アルコール関連問題を抱える者及びその周囲の者すべてがアルコールに関する正しい知識を有する社会を作り上げることにより常習飲酒運転の根絶を図り、飲酒運転の根絶を達成することを目標とする。

目標を踏まえた常習飲酒運転者対策の対象

- ・常習飲酒運転者の最も大きな割合を占めると考えられるハイリスク飲酒者に対する対策が重要。
- ・アルコール依存症者、ハイリスク飲酒者以外の者も含めてアルコールに関する正しい知識の普及、啓発を行うことも重要。

常習飲酒運転者の実態

- ・飲酒者のどの程度の者が常習的に飲酒運転を繰り返しているのかは明確ではないことから、暗数を含め、常習飲酒運転者の実態に係る推計を行うことは困難。
- ・各種調査により、ハイリスク飲酒者等の問題のある飲酒行動を取る者により、一定の割合で飲酒運転が繰り返されていることが考えられ、相当程度の者が年に1回以上、飲酒運転を行っていることが懸念される。

ブリーフインターベンション及びアルコール・インターロック装置の活用方策について

- ・ブリーフインターベンションについて、飲酒行動を変更させる効果がある。ブリーフインターベンションの特徴は簡便な手法であることであり、その活用を促進することが適当。
- ・アルコール・インターロックについて、多量飲酒回数が減少する傾向が見られ、また装置の使用者へのアンケート結果において、一定程度の飲酒運転の抑止効果が期待されるとの認識が示された。一方で、使用者への負担が大きいかことや信頼性等について、装置に係る課題も明らかとなった。このため、現状の装置を前提とした場合には、個人又は企業における自主的な活用を促進することが適当であると考えられる。

## ◆ 提言

検討結果及び検証実験の結果を踏まえ、従来の取組が必ずしも十分ではないことから以下の取組について、今後積極的に取組むことを提言した。

- ・事業者、個人によるブリーフインターベンションの活用を可能とするために、ハイリスク飲酒者に対して適切に知識の付与や指導を行うことができる人材育成の促進。
- ・今後の更なる幅広い普及を図る観点から、より簡易で短時間のブリーフインターベンションの開発。
- ・飲酒運転違反者に対する指導等におけるブリーフインターベンションの実施に向けた取組。
- ・アルコール・インターロック装置に係る課題の解決に向けた装置の技術開発の促進。
- ・ハイリスク飲酒者の減酒の達成を支援するブリーフインターベンションやアルコール・インターロックについての情報についての幅広い普及・啓発。
- ・国民一人一人が飲酒に対して寛容な社会的背景を変革する意識を持つこと。

その他、従来取組まれている施策について、今後も引き続き実施するべき旨を提言した。